Osaka University Knowledge Archive

Title	大都市圏周縁部農地の計画的保全に向けた景観評価に関する研究
Author(s)	松本, 邦彦
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/1981
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【84】

氏　　名	松（まつ）　本（もと）　邦（くに）　彦（ひこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（工　学）
学　位　記　番　号	第　２２９７５　号
学位授与年月日	平成21年３月24日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 工学研究科環境・エネルギー工学専攻
学　位　論　文　名	**大都市圏周縁部農地の計画的保全に向けた景観評価に関する研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　澤木　昌典 （副査） 教　授　矢吹　信喜　　准教授　福田　知弘　　准教授　松村　暢彦

論　文　内　容　の　要　旨

市街化圧力減退期における大都市圏の周縁部では、残存する農地の宅地化予備地としての役割は低下し、現存の農地と市街地とが混在する環境を活かした地域環境の形成が求められており、その手段の一つとして居住者が実感しやすい景観の評価に基づく農地の計画的保全は有効だと考えられる。しかし農地と他土地利用とで構成される景観に関する評価手法は確立されておらず、景観の状況把握及びそれに基づく保全方策は十分に行われてい

ない。このような背景のもと、本論文は、農地と他土地利用とで構成される景観の評価手法の開発、及び同手法の適用による大都市圏周縁部における農地の景観特性の把握、及びそれらの景観特性と地域居住者の評価との関係の分析を通じて、大都市圏周縁部の農地の計画的保全および景観形成のあり方について論じたものである。

本論文は、本編６章と序章・終章からなる。

序章では、研究の背景と目的を示し、既往研究の整理、用語の定義を行うことにより、本研究の位置づけを明確にした。

第1章及び第2章では、大阪都市圏を事例に、大都市圏における農地及び農地と他土地利用との関係を整理することで、特に戦後に急速な減少が発生したが、周縁部では局所的に農地が保全されていること、大阪都市圏に存在する農地の多くに関して保全に向けた法的担保が十分でないこと、周縁部では近年人口停滞にありながらも、農地の住宅地や商店などへの変化が多く発生していることを明らかにした。

第3章では、農地と他土地利用とで構成される景観に対して抱く心理評価の構造を明らかにし、景観評価に影響を及ぼす要素と、その要素の有無により生まれる心理評価及び景観の向上に向けた必要条件を考察した。

第4章及び第5章では、農地と他土地利用とで構成される景観の評価手法として、農地と隣接土地利用との境界線に着目したエッジライン分析を考案し、その有効性を示すとともに、大阪都市圏北部の区域区分境界付近に位置する全ての農地を対象に、隣接土地利用とで構成される農地の景観の特性を整理し、農地規模や法的位置づけと併せて、景観評価に基づく農地の計画的保全の可能性を検討した。

第６章では、居住者アンケート調査の結果に基づき、農地と他土地利用とで構成される景観および農地に対する住民の認識、及び「お気に入りの景色」の景観特性の把握を行った。これにより、周囲の大半を住宅地等で囲まれた農地でも視対象として評価されていること、農地以外の視対象を眺めるための視点場および視線を農地が担保していることが明らかになった。

終章では、以上を総括するとともに、市街化圧力減退期の大都市圏周縁部における、農地と他土地利用とで構成される景観の特性に基づいた農地保全の方向性と方策、及び景観形成に向けた農地以外の環境の整備方向性について考察した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、市街化圧力減退期における大都市圏の周縁部において、残存する農地と市街地とが混在する環境を活かした土地利用および景観形成に関する計画論の構築を目指したものであり、大阪府北部を対象に、大都市圏周縁部における景観の評価手法の開発、及び同手法の適用による農地の景観特性、さらには地域居住者の評価との関係の分析を通じて、大都市圏周縁部の農地の計画的保全および景観形成のあり方について論じたものである。

得られた結果を要約すると、以下のとおりである。

（１）農地は戦後に急速に減少したが、大都市圏周縁部では局所的に農地が保全されていることや、それらの多くは保全に向けた法的担保が十分でないこと、さらに人口停滞の近年にありながらも農地の住宅地や商店などへの変化が多く発生していることを明らかにしている。

（２）農地と他土地利用とで構成される景観に対して抱かれる心理評価を、「開放感・景色の広がり」「自然」「建物・構造物のデザイン」「生活・生業」の４つの評価項目群と必要条件とから構造化し、居住者評価に基づいた農地保全や景観形成に向けた基礎的な知見を抽出している。

（３）農地と他土地利用とで構成される景観の評価手法として、農地と隣接土地利用との境界線に着目したエッジライン分析を新たに考案し、その有効性を示している。

（４）対象地域の市街化区域－市街化調整区域の境界付近に位置する全ての農地を対象に、隣接土地利用とで構成される景観特性について、上記のエッジライン分析を用いて農地の規模や法的位置づけと併せて整理・考察し、エッジライン分析に基づく農地の計画的保全が可能であることを示唆している。

（５）農地周辺居住者へのアンケート調査を実施し、周囲の大半を住宅地等で囲まれた農地でも居住者が好む視対象として評価されている農地が存在することや、農地が農地以外の山などの遠景を眺めるための視点場および視線を提供していることなどを居住者による景観評価の実態を明らかにしている。

（６）以上の知見をふまえて、大都市圏周縁部の農地について、農地と他土地利用とで構成される景観の特性分析に基づいた今後の保全の方向性とその方策、さらには農地以外の環境の整備による景観形成について、有用な提言を行っている。

以上のように、本論文は環境・エネルギー工学の発展に寄与すること大である。

よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。